

旧瑞陵中校舎解体に思う

「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり」

松尾芭蕉の紀行文『おくの細道』の書き出しです。彼は月日が過ぎ去ることに決してしがみついています。彼あらゆるものが時と共に変わっていくのだという考え方ももっています。

五十八年前、「東濃一のデラックス」と評された旧瑞陵中学校の解体作業が進んでいます。外から見ると、二階のサッシ窓や黒板や全て外され、教室のコンクリートむき出しの壁が目にとまります。どこかをたたいているらしき大きな音が、がらんとした校舎にこだまします。それが耳に届く度に、私は胸を打たれるような感覚に襲われます。いつかはこういう日が来るとわかっていても、やはりつらさは避けられません。

そういう心境になるのは、やはり歴史のせいなのでしょうね。学校を舞台にして、さまざまなドラマがそこに繰り広げられてきました。それが人々の心の中に残っているからこそ、建物を見るとフラッシュバックするのでしょうか。

今では人手に渡った旧釜戸中学校。私が育った校舎ではありませんが、息子たちの授業参観や学校行事に参加したときのことか思い出されます。小学校にと様変わりした旧日吉中学校。よく授業参観に行きました。生徒と教師が和気あいあいと授業していた光景が蘇ってきます。

その場所で、人がどのように生活してきたか、そのときの息づかいがしっかりと心に焼き付いているからこそ、それが蘇ると感傷的になるのです。

そういえば芭蕉も感傷的になっていますよ。平泉という場所で辺り一面の草原を見て涙を流しています。

夏草や 兵どもが 夢の跡

しがみついている彼も、そこに歴史を感じたのでしょね。そんな彼に、私は偉人であって人間らしさを感じます。私と芭蕉は同じということかな。(七月二十日記)

